

企画展 共存する小さな渡来者たち

シロツメクサもダンゴムシも
海外からやってきた

会期：2024年3月20日（水・祝）
～ 5月26日（日）
会場：本館 2階 企画展示室

外来種はすべて排除すべきだ——この企画展の目的は、そんな誤解を解消すること、または誤解が生まれないようにすることです。

いわゆる外来生物も含め私たちの身のまわりには海外からやってきた生物がたくさんいて、とくに目立ったトラブルもなく暮らしています。エノコログサ、シロツメクサ、モンシロチョウ、それにダンゴムシ（オカダンゴムシ）も海外からやってきました。この企画展では、人類の渡来以後に海外から日本列島にやってきて定着した生物を、人為によるものかどうかを問わず「渡来者」と呼ぶことにし、そのうち兵庫県で身近に見られる植物や虫たちをその来歴とともに紹介します。

その昔、農業とともに

丹波竜がいた時代、この世に人類は存在しませんでした。人類が分布を拡げ日本列島に定着したのは旧石器時代。兵庫県でもっとも古い遺跡は約3万数千年前のものだそうです。以後縄文時代にかけて、採集・狩猟を中心とした生活をしながら人々は細々と暮らしていましたが

（写真1）、縄文時代の終わり頃、北部九州に稲作が伝わりました。鬱蒼とした森林は切り開かれて新たな環境が生み出され、農地や集落が



写真1 常設展 本館 3階「縄文時代のヒトと自然」
定住生活が始まり小規模ながらヒョウタンなどの栽培も行われていました。水田はまだありません。人と自然の博物館の常設展には、これ以外にも、地球と生命の歴史から都市の特性まで、企画展に関連するテーマがたくさんあります。この機会にあわせてご覧ください。

人口の増加とともに拡大していきました。渡来によりさまざまな栽培植物や家畜が導入されると、さまざまな動植物がこれらに伴って渡来し、明るい環境を好み農耕による攪乱に耐えられる種が分布を拡げていったと考えられています。

エノコログサをはじめ田畑のまわりのなじみ深い雑草の多くが、農業の伝来とともに大陸から渡来しました。モンシロチョウ（写真2）はダイコンやアブラナが持ち込まれた際にやってきたと考えられています。

グローバル化、都市化とともに

古代から中世にかけて徐々に各国との交易が拡大すると、人の食料に限らず園芸植物や珍奇な動物もやってきました。江戸時代後期から明治時代になると、工業化が進んで貿易が活発化し、20世紀後半には航空機による往来が飛躍的に増えました。21世紀の今、経済のグローバル化とともにますます多量の物資が世界中を飛び交っています。渡来者が増えるのも必然でしょう。

人々の暮らしは豊かになり、人口はこの100年間にざっと3倍となって、都市圏の急速な拡大を促しました。都市ではそれまであった



写真2 モンシロチョウ
奈良時代にアブラナ科野菜とともに大陸から渡来したと考えられています。吸蜜している花は江戸時代の終わり頃鑑賞目的で導入された北米原産のヒメジョオン。

農地や農村環境は一掃されてさまざまな緑が創出され、都市的環境は新たな渡来者に定着場所を提供しました。市街地の公園や幼稚園・保育園の園庭、学校の校庭で、四季折々私たちの目を楽しませてくれる草花には、多くの渡来者が含まれています。

シロツメクサは、1846年にオランダから幕府への献上品に詰物として使われていた枯れ草から種子を得て育てたものが由来だそうです。ダンゴムシ（オカダンゴムシ）は明治時代にヨーロッパからの船の積荷に付随して侵入したと考えられています。

対策が必要なものは一部

貿易が盛んになって生物の導入が増えるに



写真3 園庭や公園で子どもたちが見つけた花
渡来者や園芸品種が多く含まれています。上左：姫路市立的形こども園（4月18日）、上右：恵泉保育園（淡路市、4月27日）、中左：佐用町立南光保育園（5月16日）、中右：佐用町立利神保育園（5月18日）、下左：蓮池こども園（播磨町、9月26日）、下右：深田公園（三田市、10月18日）

つれ、人畜への伝染病の拡散や病害虫による農業被害が世界的に問題となり、明治時代、日本でもその対策が始まって、以後検疫所、動物検疫所、植物防疫所による水際対策や防除が行われています。これらは感染症の予防、畜産の振興・漁業の発展、農業生産の安全及び助長を目的としたものですが、2004年「特定外来生物による生態系等に係る被害の防止に関する法律」（外来生物法）が施行され、新たに生態系被害の防止という視点が加わりました。

私たちが健やかに生きるためには病気や怪我を克服し、安定的に食料を確保することが必要です。ときには「害虫」を駆除しなくてはなりません。しかし、すべての虫が害虫ではありませんね。外来生物法の目的は「特定外来生物」による被害を防止し「生物の多様性の確保に寄与することを通して国民生活の安定向上に資すること」です。対策が必要とされる「特定外来生物」は、外来生物の中の一部です。

ルーツに思いを

日本列島にやってきた私たち人類は、長い年月をかけて土地を改変して新たな環境を生み出し、世界中からさまざまな生物を導入してきました。私たち自身の歴史が色濃く反映された結果として、人類が改変してきた環境を好む、あるいはそんな環境に耐性のある生物が、身近な環境で共存し繁栄しているのです。

草花にも虫たちにも、すべてルーツがあります。まずは温かいまなざしで、今そこに暮らす生物がいつどうやってきたのか、思いを馳せてみませんか。その上で、未来の地域の環境をどうするのか、そこでどんな生物とどう付き合うのか、考えてみてはいかがでしょうか。

八木 剛・小館 誓治・鈴木 武
（コミュニケーションデザイン研究グループ）